





国語問題

はじめに、これを読むこと。

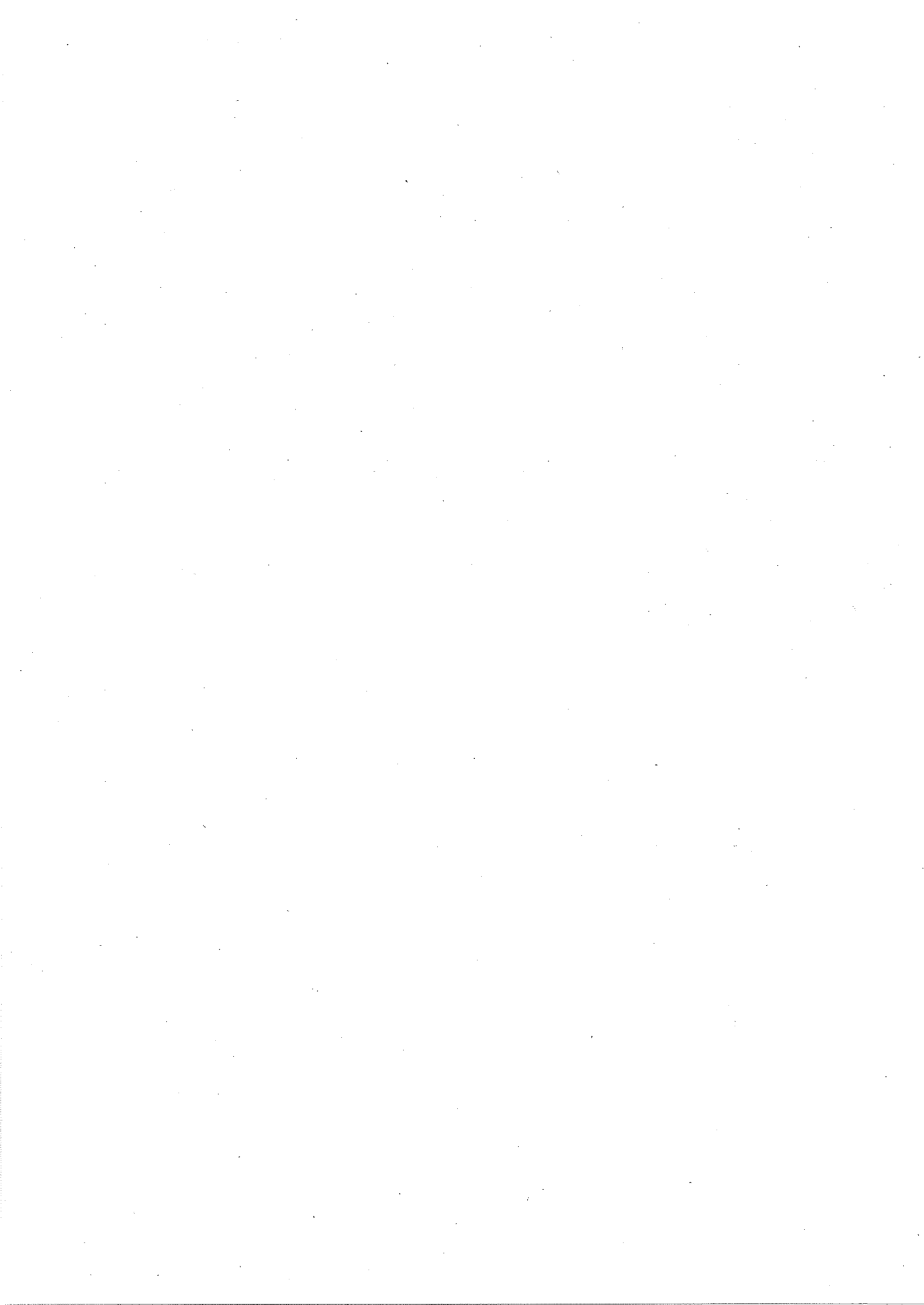
(注意事項)

1. この問題用紙は24ページまでである。
2. 解答用紙の所定の欄に、必ず氏名を記入すること。
3. 解答用紙には受験番号が印刷されているので、受験票と照合して受験番号が正しいかどうか確認すること。
4. 解答はすべて「解答用紙」の解答欄に記入またはマークすること。解答欄以外のところには何も記入しないこと。
5. 解答は、必ず鉛筆またはシャープペンシル(いずれもHB・黒)で記入すること。
6. 訂正は消しゴムできれいに消し、消しくずを残さないこと。
7. 解答用紙は、絶対に汚したり折り曲げたりしないこと。
8. 文字は一点一画まで正確に書くこと。
9. 解答用紙は持ちかえらないこと。
10. この問題用紙は必ず持ちかえること。
11. 試験時間は60分である。

(マークの記入例)

良い例	悪い例
	  

第六卷
附錄



(一) 次の文章を読み、後の問に答えよ。

われわれは不安な時代をきている。国際情勢、就活、地震、老後、失業、結婚、保育園、ハラスメント、親の介護、体調、うつ、詐欺、盗撮や痴漢をされる不安、痴漢したと誤解される不安、その他もろもろ……。

一九八〇年代初頭、われわれは『ジャパン・アズ・ナンバーワン』（エズラ・ヴォーゲル）といわれ、希望に満ちた日々を過ごしていた。日本で作りだされる製品こそが、どれも世界最先端のものであって、人類の生活スタイルを変えていくと思えていた。日々開発される便利な機械を使いこなすのに追われながら、電卓、電子手帳、ワープロ、エアコン、スポーツカー、電子レンジ、平面テレビ、パソコン、インターネット……、いよいよ便利さと、安全と豊かさを享受できるようになる「未来」があった。

一九八五年のつくば科学万博（未来博）では、壁掛けテレビやカーナビやネットが未来の製品として紹介され、数十年後にはガンが治るようになっていくという展示があったが、それらはみな、本当だった。本当以上に本当だった。特にガンは、当時は黒澤明監督の映画『生きる』（一九五二年）にも描かれていた不治の病であり、その診断は死刑宣告のようなものだったが、今日では時間との競争となっている。ガンになるのが一年遅ければ、それだけガンが治る可能性が増すというわけだ。

それなのに今日、ひとびとが浮かない顔をしているのはなぜだろう。科学万博の主催者たちも、まさかこんなことになっていくと「予想」してはいなかったことだろう。

I

科学技術のおかげで、人類を脅かすすべての不安材料が払拭され、ひとはいよいよ安全で便利な生活をするようになると考えられていた。せいぜいキューブリック監督『2001年宇宙の旅』（一九六八年）に登場するHALのようなマザー・コンピュータが、人間に取って代わることになるかもしれないと危惧されていたくらいだった。その映画は、科学技術の楽観主義にちよつとした懐疑を投げかけていたが、しかし、問題はもつとずつと深刻だったことが、いま少しづつ見えてきている。

人類に取って代わりそうなのは、巨大なマザー・コンピュータではなかった。スーパーコンピュータでもない——それは膨大

な計算を素早くするだけだ。

AIはといえば、それほどはすぐくない数多のコンピュータにインストールされ、いつのまにか人間の仕事を交替していく「優れもの」である。事前にすべての対応を組み込んでいるという意味でのプログラムではなく、事後的にプログラムを自動生成していくというポストグラム。自分で自分の判断を変えていく仕組に、コンピュータは生まれ変わった。

判断すべき条件とデータを増やしていき、結果をいつもフィードバックすることによって、監査したり、診断したり、記録したり、調査したりと、専門家の判断と同等か、それ以上に正しい判断に到達する。大多数のひとが、人間よりもAIに任せ方が安心であると思いはじめる。

II

それはそうだ、とわたしも思う。たとえば重い病気でないかと不安なときは、たまたま出会った技量の分からない医師よりも、——もちろんネットの半可通の回答者たちよりも——、AIに答えを出してもらった方がよさそうである。なにしろ将棋に一生を捧げているひとたちを、生まれて数年のAIが容易に負かしてしまうくらいである。医療や戦略など、少なくとも、限定された領域で生じる条件の組みあわせとその対処法についての判断は、AIの方が優れているに違いない。

あるひとたちは、AIの普及が管理社会を生み出すとか、個人のプライバシーがなくなってしまうとか、人間が機械に支配されるようになるとか、人間の仕事が奪われるとかいって、盛んに警鐘を鳴らしている。

それは間違つてはいないと思うのだが、もつと大きな問題がある。それは、ひとびとの、さきに挙げたような不安を、AIは解消してくれそうにもないということである。

たとえば、わたしが失業しそうになって「うつ」の症状が出ているとして、もしAIが普及していたなら、その判断はどのようなものになるであろうか。転職の条件や状況について、あるいはどんな薬を服用すればいいかについては、正しい判断を与えてくれるだろう。だが、がんばれないわたしが、資本主義の根本的問題や社会保障政策の問題点などを考察しながら、自分の将来の目標を合理的に決定せず、したがってその適切な手段を実行しようとしないなら、——「愚行権」といってもいいが——、それに対しては、どんなアドバイスをしてくれるだろうか。

AIは、成りゆきまかせや、いちかばちかや、横並びや、「放置する」や、「なし崩しにする」や、「破滅してもいい」といったタイプの動機に対して、どんなアドバイスをしてくれるだろうか。

まして、ひたすら親との確執に苦しんでいるひとや、新宗教の教義に囚われてしまっているひとや、他人を支配しようとすることばかりに注力しているひとなど、他人の判断をまったく受け容れる姿勢のないひとたちの抱えている問題に対しては、そもそもどんなアドバイスがあり得るだろうか。

AIは、マザー・コンピュータではない。つまり、母親のように、あなたを気にかけてはくれない。AIには、人類の未来や個人の将来を心配し、社会的諸条件と一人ひとりの意識を調停しようとする性質が原理的にない。そのことの方が、もっと問題である。

AIは判断を創出しているのではなく、ひとびとのあらゆる判断を、ひとが感覚できないものまでのさまざまデータを含め、——急ぐことでは「エッジ・コンピューティング」として自前のメモリで対応するが——、ネット上のクラウドを介して繋がりがあって、ひとが記憶できないほどの大量のデータ(ビッグデータ)を用いてシミュレートするだけである。

正しい判断をするのではなく、正しいとされた判断をさらにデータとしてインプットして、正しいとされる判断の確率を上げていくだけだ。AIスマートロボットがギャグをいうにしても、それは世界中のひとたちの笑いの反応をクラウドを通じてフィードバックしているからであって、それらにとってはちつともおかしなことではないのである。 III

AIにとって、人間は光学センサーの眼のまえにいて、クラウド(群集)という霧もやのなかにおいて、クラウド上のデータのなかから抽出される統計的存在者でしかない。正しさを判断するのはどこまでいっても人間であり、そもそも「正しさ」は人間にとってのものでしかない。機械にとつての正しさは、精確に作動すること、バグがないことではないのだ。誤りも、ただ訂正すべきデータにすぎず、それらにとつては、恥ずべきことなのではない。

したがって、もしAIにありとあらゆる判断を任せてしまうとしたら、それは確かに何らかの判断を示すだろうし、その判断は、いずれにせよ多くのひとが納得する妥当な判断ではあるだろうが、しかしそこに「未来」はない。

未来とは、現在よりもよい状態になっているはずの、これから先のある時点のことである。単に時間の未来ということであれば、いつの時代にも未来はあるが、それはひとが期待して、それに向かって努力しようとする「未来」ではない。AIの説く未来は、現在の延長でしかない。

AIの前提する未来においては、ただ時だけが刻一刻と経ち、暦がその数を積み上げていく。それは、時間測定法における未来であって、われわれの「未来」ではない。そこに夢や希望はない。未来という語が夢や希望という語と相重なっていた時代が終わり、未来という語で、せいぜい似たような要素がくり返し姿を現わす退屈な現在か、あるいはいたるところ、現在の廃墟としての、破壊と悲惨とが組み込まれた疑似過去が待ち受けるばかりとなる。

AIの判断は外挿法的シミュレーションであり、過去に起こったことを未来に引き伸ばして予想する、その推測を詳細に徹底したものである。ルールがあつて条件の変化しないものに対しては最強であるが、あり得ないことに挑戦するとか、いつもと違ったことをやってみるといふ判断は、そこにはない。ところが、そうした異例のことをなそうとする判断の向こうにこそ、人間の考える「未来」がある。

ルーティン化した業務における判断に対し、その判断の帰結から生じる悲劇についての感性こそが、人間の判断を賦活して、いつもとは異なつた判断へとひとを差し向ける。夢や希望という名のもとに、明確なイメージがないとしても、ひとはそれぞれに「未来」に向けて判断しており、その場の「課題の解決」だけを考えているわけではないのである。

AIが普及するということは、社会におけるさまざまな業務の運営が自動化され、人間からするとすべてが A で何とかなるようになるということである。そこには、判断に意義を与えてきた「未来」を考える人間がいなくなってしまう。

だから、わたしがAIに心配するのは、AIが人類を未来の消失から救つてくれそうもないということなのだ。むしろ、それに加担する装置なのではないかということだ。

従来ひとびとが抵抗してきたのは、勝手な、あるいは間違つた判断をする政治権力に対してであった。だが、そうした、責任が追及されるべき権力も、AI機械が入り込んで、きつと淡泊なものになつてしまふだろう。その結果として起こる事故や不祥

事や争いは、一人ひとりが受忍するものでしかなくなってしまうだろう。状況をよりよいものへと改善したり、理想社会に向かうとすることなど、だれも思いつけなくなってしまうだろう。

近代(モダン)にこそ、「未来」があった。歴史の発展段階があると前提されていたからである。「つぎの時代」があると前提されていたからである。

今日、「未来」がないのは、社会が悪いから、悲観的材料しかないからではない。AIが出現したからでもない。逆に、AIが普及し得る社会が到来したから、AIが出現した。

IV

すなわち、それがポストモダン社会である。ポストモダンとは、——ジェームズ・C・スコットによるとそれは一九七二年三月一六日だったそうだが(『実践 日々のアナキズム』第二章)——、近代が終わったということである。近代が終わったということは、「未来」がなくなったということなのである。

なぜポストモダンになったのかとか、どうやったらまた近代のようになるのかとか、尋ねてみたいひともいるだろう。だが、モダンという「進歩する歴史」の時代を支えた人間の意識が摩耗してしまったということだけのことなのだ。ひとびとはただ、そのような意識が虚しいと知ってしまった。人間が歴史の主人公ではないということを知ってしまった。モダンの神話が消えて、理念としての西欧文明の価値が暴落した、ということなのだ。

ひとはモダン(近代)の方がよかったというだろうか。だが、モダンがあったからポストモダンになった。モダンが完全に忘れ去られないかぎり、もはやモダンには戻り得ない。どうしてもモダンに戻りたいと思うひとは、世界戦争や小惑星の衝突といったカタストロフ(破滅的出来事)によって、大多数のひとびとの記憶が失われる事態を期待するほかはない。まさか、それで戦争が起こることを望んでいるひとたちがいるわけか？

AIが普及しつつあること自体は「未来」なのではないか、と思うひともいるかもしれない。便利で楽な社会である。しかし、その普及は人類の進歩ではない。人間が歴史の主役の座から降りるのだから。

AI、およびそれを活用した機械とロボットとネットの普及は、そのような意味での「未来」ではない。未来ではないというこ

とは、B だということだ——どうなるかは、やってみなければ分からない、ということだ。

数十年後にははつきりしてくるだろうが、新しい環境のなかで、人間性も変わるだろう。だから、そうしたことを嘆くひともなくなっているに違いない。V

管理社会になるといつて反発しているひとも、プライバシーが失われると気にしているひとも、機械の方が人間より優れていることに憤りを感じているひとも、自分が担当すべきだった仕事をいつのまにか機械がしていることに気づくひとも、すべていなくなってしまうているだろう。『そして誰もいなくなった』(アガサ・クリステイ)というわけだ——われわれはそれほど悪いことをしたつもりではなかったのに。

いまだからこんな話ができる。というのも、「確かに何か変だ」と感じるひとたちが、まだ大勢いるだろうからである。とはいえ、パソコンのディスプレイが少しずつ汚れていつて色が薄くなってしまうていて、ある日ふと拭いてみたら、驚くほど鮮やかな色になったということが、おそらく数十年のあいだに起こるのだし、しかしそのときは、^fだれも自分の社会認識のディスプレイを拭いてみようなどは、思いつきもしないのだ。

人間が減つていき、その分、それを埋めあわせるかのようにAIとロボットが普及していく。そうした事態が受け容れられつつあるということだ。つまり、AIが普及する理由は、ひとにやらせるよりも効率がよいという点にある。ロボットが普及する理由は、その仕事が人間にできて、人件費よりも安価にできるからである。AIは、ひとをパラダイスに住まわせるためにはなく、結果的には、ひとをこの平凡な惑星から放逐するために普及させられていく。

(船木亨『現代思想講義——人間の終焉と近未来社会のゆくえ』による)

問一 傍線 a「問題はもつとずつと深刻だった」とあるが、どのような点でもつとずつと深刻だったのか。最も適切なものを次の中から一つ選び、その番号をマークせよ。

- 1 AIの普及が管理社会を生みだし、人間が機械に支配され、人間の仕事が奪われるという点。
- 2 AIには、人類の未来や個人の将来を心配する性質がなく、ひとびとの不安を解消してくれないという点。
- 3 AIは、人間を統計的存在者としてしか見ないので、すべてのひとを納得させられる判断はできないという点。
- 4 コンピュータは膨大な計算を素早くするだけだとして、科学技術の樂觀主義に懐疑を抱く人が増えているという点。
- 5 AIにとつての正しさは、バグがなく精確に作動することではないため、安全で便利な生活は保障できないという点。

問二 傍線 b「人間の仕事が奪われる」とあるが、本文に即して考えると、AIに奪われない人間の仕事には、どのようなものがあると考えられるか。最も適切なものを次の中から一つ選び、その番号をマークせよ。

- 1 芝や風の状態を分析してゴルフアーに助言するキャディー
- 2 雲の動きや気圧配置を観察して天気を予想する気象予報士
- 3 食べ物栄養バランスが整った献立を作成する管理栄養士
- 4 新しい発想と閃きで斬新な洋服を生み出す服飾デザイナー
- 5 企業の決算が会計基準に則っているか監査する公認会計士

問三 傍線c「もしA Iにありとあらゆる判断を任せてしまうとしたら、それは確かに何らかの判断を示すだろう」とあるが、

AIはどのように判断しているのか。その説明として当てはまらないものを次の中から一つ選び、その番号をマークせよ。

- 1 AIは、事前に組み込まれた、あらゆる可能性に対応できるプログラムによって自動的に正確な判断をしている。
- 2 AIは、ひとが感覚できないような詳細なデータや記憶できないほどの大量のデータを用いて判断をしている。
- 3 AIは、自ら正しい判断をするのではなく、正しいとされた判断をインプットして、正しいとされる判断をしている。
- 4 AIは、条件とデータを増やし、結果をフィードバックすることで、専門家の判断と同等か、それ以上の判断をしている。
- 5 AIは、これまでにひとびとが創出してきた判断をデータベースとして用い、そこからシミュレートした判断をしている。

問四 空欄

A

と

B

に共通して入る言葉として最も適切なものを本文中から七文字で抜き出せ。

問五 傍線d「そこに「未来」はない」とあるが、それはなぜか。最も適切なものを次の中から一つ選び、その番号をマークせよ。

1 A Iの説く未来は現在の延長でしかないため、いずれ破滅と悲劇が積み上げられ、ひとはA Iの判断に納得できなくなるから。

2 夢や希望というイメージのもとに、その場の課題の解決を積み上げていかないと、われわれの期待する未来は到来しないから。

3 ルールがあつて条件の変化しないものについて、人間はA Iより優れた判断ができないので、未来に向かって努力しようとしなくなるから。

4 あり得ないことに挑戦するとか、いつもと違ったことをやってみるなど、異例なことをなそうとする判断がなければ、人間の未来はなくなるから。

5 ルーティン化した業務における判断の帰結から生じる悲劇について、A Iがいつもとは異なつた判断をすると、未来に向けた人間の判断を賦活するから。

問六 傍線 e「AIが普及し得る社会が到来したから、AIが出現した」とあるが、筆者はどのような社会変化が起こったと考えているか。その説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、その番号をマークせよ。

1 モダンの神話が消えて、理念としての西欧文明の価値が暴落した結果、ひとびとがこれまでとは異なる新たな価値観を持った未来を模索するようになった。

2 「進歩する歴史」を支えてきた人間の意識が摩耗し、現状をよりよい方向へと改善していくことに疲れてしまった結果、ひとびとが未来のない現状を嘆くようになった。

3 人間が歴史の主人公でないことに気付き、よりよい未来のために主体的に行動する意識が虚しいと知った結果、ひとびとが効率優先の便利で楽な生活を受け容れるようになった。

4 勝手な判断や間違った判断をした政治権力へのひとびとからの抵抗が淡泊なものになった結果、それに伴うさまざまな不利益を一人ひとりが受忍するようになった。

5 ひとびとが未来のないポストモダン社会に絶望し、「次の時代」があることを前提としたモダン(近代)の方がよかったと考えるようになった結果、近代社会への回帰が望まれるようになった。

問七 傍線f「だれも自分の社会認識のディスプレイを拭いてみようなどとは、思いつきもしない」とはどういうことか。その説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、その番号をマークせよ。

1 AIの普及によって得られた便利で楽な社会に安住し、その社会やひとびとのあり方について、何か変だと疑問を感じることをすらなくなるといふこと。

2 AIが普及した理由は、人件費より安価で効率よく業務が遂行できるからだと言われているが、本当にそうなのか検証してみようとは思わないといふこと。

3 AI、およびそれを活用した機械とロボットとネットの普及を受け容れることで人間が減っていくという現実に対して危機感を感じなくなるといふこと。

4 現在の状況を嘆いているひとでも数十年後には時代や環境の変化に伴って考えが変わるといふ可能性を誰も認識していないといふこと。

5 たとえプライバシーが失われたり雇用が奪われたりしたとしても、AIの導入と普及が人類を新しい歴史の発展段階に導いたと信じて疑わないといふこと。

問八 本文からは次の一文が脱落している。入るべき箇所は本文中の **I** ~ **V** のどこか。最も適切なものを次の中から一つ選び、その番号をマークせよ。

ひとを幸福にすることは、科学技術だけでは無理なのだ。

1

I

2

II

3

III

4

IV

5

V

問九 傍線Ⓔ AIは、ひとをパラダイスに住まわせるためではなく、結果的には、ひとをこの平凡な惑星から放逐するために普及させられていく」とはどういうことか。本文に即して五十字以内(句読点を含む)で説明せよ。

(二) 次の文章を読み、後の問に答えよ。

坂口安吾の「風博士」は、風博士の憎むべき敵を蝟^た博士としている。風に対立する語を蝟としたのである。火と水、山と川、太陽と月、天と地と同様に、風と蝟を置いた。

奇異なとりあわせと見える。この奇怪なナンセンス小説の作者のほかには「風」と「蝟」とを対語とした者はないだろう。

だが、あらためて風の対語をさがしてみると、私たちの言葉の約束のなかには、それは見あたらない。「花鳥風月」というセツトはあっても、そこでの風と月とは対語でもなんでもない。風月堂などと菓子屋の屋号にはなるが、古びた雅^イびの残滓^アにすぎない。

ここで読者諸氏にも風の対語を考えていただきたいのだが、その前に順序として、風とは何であるか。

広田勇著『地球をめぐる風』を借りると、「風とは要するに空気の動きのことである。したがって、水の動きにはコップの水から川の流れや海流までがあるのと全く同様に、空気の動きにもいろいろな形態があつてよい」ということであり、煙草の煙がゆらぐくらいの風から地球を一周して吹くジェット気流や貿易風まで大きさも継続時間もさまざまであり、さらに、「同じ渦巻きでも、つむじ風と竜巻と台風はそれぞれ違う。魚の呼び名におけるブリとハマチの関係みたいに、竜巻の大きくなつたものが台風だというわけではない。裏返して言えば、違うからこそ別な名前をつけて区別されるのだ、とも考えられる。つまり、経験的に知られているさまざまな気象現象は空気の運動の法則という共通性の中にあつて、なおかつそれぞれに個性的な形態や振る舞いを示しているのである」ということになる。

空気の運動の法則を知ることが農事にも重要であるが、海をゆく船乗りたちにとっては生命にかかわることであつて、たとえば、「大風俄に吹きやむ時は、必ず逆風生ず。大風次第に吹きやむ時は風にもどしなし」(『元和航海記』)といった法則をさまざま見つけていたのだが、しかし、風はなかなか一筋縄ではとらえられない。思わぬ風でナンパする船はあとをたたなかつた。いまは気象衛星も使いコンピュータも使つて空気の動きを四六時中とらえているけれども、それでも天気予報はなかなかあたらず、

予報官のジユウメンはなくならない。

風は気まぐれである。

私は風の音を収めたテープを一本持つていて、ときおり夜中に一人で聴く。イヤホーンを通して、笹をゆらす風、葦原の風、ブリザード、台風、吹雪などがつきつき吹きすぎるのだが、どの風も一様には吹かない。風は一吹きごとに違っている。同じブリザードでも、強弱、大小、刻々に違っている。

風は刻々に変化する。地球大、年単位ぐらいのスケールでは、日本列島には夏から秋に台風がやってくるというような規則性があるけれども、一つ一つの風は気まぐれで不規則である。

私がイヤホーンで風の音を聴いて飽きないのは、その気まぐれ、その不規則のせいだ。自由の感覚がそこにある。抽象語の自由ではなく、からだで感じる自由と呼ばばいいか。変化してやまない風はまた、生命の感覚とぴったり重なる。目には見えない自由と生命とが、これも目には見えない風のなかでうごきだす。私だけではあるまい。台風の吹きすぎる日など、誰もが、風のもたらず災害とは別に、自分のなかの野性の自由、野性の生命がうごくのを感じていないだろうか。

安吾の風博士は結婚式を前に自殺して風と化すのであるが、その風はもともと、自由と生命とをしるすすべてのものに対立しているはずである。

諸君、偉大なる博士は風となったのである。はたして風となったか？ 然り、風となったのである。何となればその姿が消え失せたではないか。姿見えざるはこれすなわち風である乎？ 然り、これすなわち風である。何となれば姿が見えないではない乎。これ風以外の何物でもあり得ない。風である。然り風である風である風である。

安吾が「然り風である風である風である」というしかないこの風は、「秋来ぬと目にはさやかに見えねども風の音にぞおどろかれぬる」(藤原敏行)の風や「風そよぐならの小川の夕暮はみそぎぞ夏のしるしなりける」(藤原家隆)の風とは大いに異なってい

る。同じ三十一文字でも明治期、山川登美子が鉄幹を晶子にゆずって気にそまぬ結婚にしばらくたななでうたった、「狂へりや世ぞうらめしきうらめしき髪ときさばき風に向はむ」の風のほうが、歌の巧拙は別にして安吾の風にくらか近い。

風は気まぐれである。均等には流れない。風は変化そのものである。風のはらむ時間は多層である。時計の時間など知らない。風は生命である。自由である。

その風に対立するものは、規則性であり、秩序であり、安定であり、また権威であり、歴史である。うごかしがたいグロテスクな現実である。

とすれば、安吾が風に対立する語として蛸を選んだのは、あながち不当ではない。無脊椎動物のなかで最高の機能を発達させたこの生きものは、人類など果敢なく消えたあとにも鉄面皮に食欲な食欲をみたしつづけるのではないか。いや、生物学の知識は安吾にも私にもないのだから、これ以上のアナロジは無用である。蛸自身はどう思っているか知らないが、私たちから見てあの姿のグロテスクさだけでじゅうぶんである。八本もの足を岩にからませて彼らはどつしりと安定し、なにものにもおどろかない。

それにくらべて風は儂いのである。儂いがゆえに生命であり自由である。風の日、人は現実のおもしをはずして異界へ飛翔しようとする自由を予感しないだろうか。

安吾の「風博士」は先の引用につづいて次の数行で終る。

(然り風である風である風である。)諸君はなお、この明白なる事実を疑ぐるのであるか。それはたいへん残念である。

それでは僕は、さらに動かすべからざる科学的根拠を付け加えよう。この日、かの憎むべき蛸博士は、あたかもこの同じ瞬間において、インフルエンザに犯されたのである。

いうまでもなく蛸博士のインフルエンザは

A

であり、蛸博士の名声はみじんもゆるぐことないであろう。風博士

はみずから蛸博士に敗れるのである。

新潟に生れ育った坂口安吾は、中学時代、授業をさぼって日本海の砂丘に寝ころんでいたという。海辺に風が吹く。波がさわぐ。松林がさわぐ。安吾少年の心がせつなくさわぐ。春、夏、秋、暮れてゆく海、それぞれの風が吹く。ことにも、冬の海辺で吹雪に向って立ってみるといい。人は世の常から切りはなされてしまう。そこはすでに非現実の世界である。異界である。風の中で日々の暮しは遠く小さく消えてゆく。

だが、その海からもどれば、鈍くうごかない現実がある。東京という都会に出ればなおさらのことである。坂口安吾が出世作「風博士」を書いたのは偶然ではない。奥野健男が「坂口安吾——人と作品」に書いている。「坂口安吾は懸命にファルスを実現しようとしていたのだ。(略)破格の悪文で、B無稽な語を書くことによつて、ちんまりとした日本の近代文学に挑戦しそれを破壊しようと企てる。しかしその底には、海辺で受けたせつない憧憬である風が吹き抜けているのだ。」

(高田宏『言葉の影法師』による)

(注)

「秋来ぬと目にはさやかに見えねども風の音にぞおどろかれぬる」…平安時代の『古今和歌集』に掲載される歌。その意味は、「秋が来たとは目にははつきりと見えないけれども、風の音によつて秋が来たことに気づかされた」。

「風そよぐならの小川の夕暮はみそぎぞ夏のしるしなりける」…鎌倉時代の『新勅撰和歌集』に掲載される歌で、「小倉百人一首」にも採られている。その意味は、「^{なな}梅の葉をゆらすそよ風が吹く小川の夕暮れは秋のように涼しいが、そこで行われるみそぎの光景は、まだ夏であることを思わせるなあ」。

ファルス…フランス語 *fars* からの外来語で、「笑劇」の意味。

問一 傍線イ、ニの読み方をひらがなで記せ。

問二 傍線ロ、ハのカタカナを漢字で記せ。

問三 傍線 a「残滓」と意味が最も近いものを次の中から一つ選び、その番号をマークせよ。

- 1 後悔
- 2 残忍
- 3 糟粕
- 4 分派
- 5 末裔

問四 傍線 b「自由の感覚」とあるが、それはどのような感覚か。その説明として当てはまらないものを次の中から一つ選び、その番号をマークせよ。

- 1 目に見えない野生の生命がうごき出すような感覚
- 2 生命が気まぐれに不規則にうごき出すような感覚
- 3 均等でなく多層的に流れる時間を過ごす感覚
- 4 目に見えない風に季節の移ろいを味わう感覚
- 5 世の常から切りはなされた異界にいる感覚

問五 空欄 A に入る語として、最も適切なものを次の中から一つ選び、その番号をマークせよ。

- 1 風邪
- 2 流行
- 3 絶対
- 4 一過性
- 5 持続的

問六 空欄 B に入る語として、最も適切なものを次の中から一つ選び、その番号をマークせよ。

- 1 口頭
- 2 高踏
- 3 恒等
- 4 好闘
- 5 荒唐

問七 傍線c「その底には、海辺で受けたせつない憧れである風が吹き抜けている」とはどういうことか。その説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、その番号をマークせよ。

1 世の常から切り離された暮らしを余儀なくされた安吾の心の根底には、気にそまぬ現実から脱出したいという思いがあるということ。

2 東京という都会の暮らしに沈む安吾の心の根底には、現実の権威から逃れて海辺に戻りたいという思いがあるということ。

3 東京という都会に出て名声を得ようとした安吾の心の根底には、自由と生命をしばるものから解放されたいという思いがあるということ。

4 奇怪な小説を書くことで近代文学を変革しようとした安吾の心の根底には、異界へ飛翔しようとする自由の感覚があるということ。

5 破格の悪文で近代文学を破壊しようと企てた安吾の心の根底には、野性的で貪欲な自由の感覚があるということ。

問八 坂口安吾が「風博士」において、風に蝮を対置した理由を、筆者はどのように説明しているか。その説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、その番号をマークせよ。

- 1 風は変化しやすく遠く小さく消えてゆくのに対して、蝮は貪欲な食欲で肥大化していくから。
- 2 風は気まぐれで自由であるのに対して、蝮はグロテスクであり安定しているから。
- 3 風は時間の流れを感じさせるものであるのに対して、蝮は不規則な動きによって空間の存在を感じさせるものだから。
- 4 風は夏から秋に台風をもたらすという規則性を持っているのに対して、蝮は野性の自由や野性の生命を持っているから。
- 5 風は空気の運動の法則から様々な気象現象を生み出すのに対して、蝮は無脊椎動物のなかで最高の機能を発達させているから。

(三)

次の文章は、紀行『佐野のわたり』の冒頭部分である。四十九歳の宗碩は、室町幕府の管領より奉納連歌の依頼を受けた二十六歳年長の兄弟子宗長に誘われ、大永二年（一五二二）七月二十日、京を發つて伊勢神宮に向かう。これを読み、後の問に答えよ。

此度伊勢の国に下り侍りしことは、去ぬる年の末つ方にや、駿州より宗長禪老便りの文して申し送られしは、大神宮立願として、独吟の千句思ひ立つことあり。しかはあれど、老の積り殊の外にて、沈吟も事行き侍らぬまま、二年三年になりぬ。あはれ春の頃、予参宮のついでもあらば、両吟にもと思ひ寄りたるは如何と申し送られ侍りき。うち見るよりあるまじき事と思ふにより、返事をさへ怠り侍るを、さしおかず催されしかば、またうち返し、此道の思ひ出にもやと思ひ成ることにて、さらばまづ山田まで着岸の比まかり向ひて、年月の積りをもなど申し送りしかば、ほどなく年変り春にもなりぬ。

互ひに障ることどもありて過ぎ行くままに、去ぬる水無月の初めにぞ、駿州よりまかりのぼられ侍りし。やがて飛脚の人して申し上せられしかど、草庵取り立つるほどにて、斬の音もほどどしく、乱りがはしき比なれば、いささか連歌などの心地もせず、からうして七月二十日頃にぞ思ひ立ち侍りし。其比尾張の国よりさる人の上洛ありしを、伊勢のわたりまでと誘ひつつ、先づ都出で侍りし。

〈中略〉

さて、二十四日、初瀬路に出で立ちて、三輪が崎行くほど、雨俄に降りきぬ。かの万葉の古言ただ今のやうに思ひ出でられて、雨宿りをなど人々言ひしも、いづこにか家もあらんと、濡れ濡れ行き過ぐるに、あかぬ心地して、返す返す佐野のわたりなどに、うち吟じつつ、泊瀬寺に着きぬ。その夜は公坊に宿りて、おのおの乾飯とり賄ひ侍るほど、三条が古思ひ出でられ侍りき。

明くれば伊勢の国に発ちぬ。今日の道までは、筒井よりの送りの人々率て行くに、鞍置きたる馬どもあまた行き迎へるが、供なる者に案内して、宮原七郎兵衛尉の迎ひの由言へり。かく言ふは菅野などいふあたりなり。これより送りの輿馬などは返しつつ、夜になりて多氣に行き着きぬ。彼へは管領の御文あればつけ侍りぬ。またの朝北畠の少将家に参り、御対面あり。それより

急ぎ立ちて、相可あひかといふ所に行きぬ。今日もまた宮原七郎兵衛尉盛孝、駒うち並べて送らせらる。射和いざわとやらんいふ所にて道のことども調へて、今日ぞ A に着き侍りぬる。

(注)

沈吟：句作など熟考すること。 事行く：うまく行く。 山田：伊勢外宮の門前町。 取り立つ：建てる。

鉦：材木を削る大工道具。 ほどほどし：長い時間がかかっている。 初瀬路：奈良から長谷寺に至る道。

三輪が崎：歌枕。奈良県桜井市金屋に伝承地がある。 泊瀬寺：長谷寺。 公坊：寺院の公務を行う本坊。

三条：源氏物語の玉鬘の侍女。玉鬘の巻には、長谷寺で三条が食事に熱中する場面がある。

筒井：奈良県大和郡山市筒井町。ここを本拠とする国人筒井氏がいた。

宮原七郎兵衛尉：宮原盛孝。北畠氏の従者。

菅野：奈良県御杖村。このあたりが大和の筒井氏と伊勢の北畠氏の勢力の境界。

多気：三重県美杉村。 相可：三重県多気町相可。 射和：三重県松阪市射和町。相可の榎田川対岸。

問一 傍線 a「宗長禪老便りの文」はどこからどこまでか。その部分の最初と最後の三字を本文中から抜き出せ。

問二 傍線 b「あるまじき事」とあるが、筆者はなぜそのように思ったのか。その理由として最も適切なものを次の中から一つ選び、その番号をマークせよ。

- 1 老齢の宗長が長旅などできるはずがないと思っていたから。
- 2 老齢の宗長に千句の独吟などできるはずがないと思っていたから。
- 3 沈吟さえうまく行かないほど宗長が年老いたとはとても信じられなかったから。
- 4 宗長と両吟するなど、あまりに恐れ多いことと感じたから。
- 5 宗長と伊勢神宮に参拝するなど、あまりに恐れ多いことと感じたから。

問三 傍線 c「此道」とは何の道か。最も適切なものを次の中から一つ選び、その番号をマークせよ。

- 1 沈吟
- 2 独吟
- 3 連歌
- 4 参宮
- 5 万葉

問四 傍線 d「年月の積りをも」とあるが、この部分の解釈として最も適切なものを次の中から一つ選び、その番号をマークせよ。

- 1 久しぶりにお会いするのですからいろいろな話をいたしましょう。
- 2 長の無沙汰をお詫び申しましょう。
- 3 お会いできなかった年月のことは忘れましょう。
- 4 お互いが重ねた年齢のことは気にしないようにしましょう。
- 5 年月を重ねた老の身をいたわり合いましょう。

問五 傍線 e「申し上せられしかど」とあるが、この部分の解釈として最も適切なものを次の中から一つ選び、その番号をマークせよ。

- 1 筆者は都の宗長のもとへ旅立ちを伝えなければしも
- 2 宗長は都の筆者のもとへ旅立ちを伝えてこられたけれども
- 3 宗長は都の筆者のもとへ伊勢に到着したことを伝えてこられたけれども
- 4 宗長は都の筆者のもとへ上京したことを伝えてこられたけれども
- 5 筆者は都の宗長のもとへ上京したことを伝えなければしも

問六 傍線 f「かの万葉の古言」とは、万葉集の古歌「苦しくも降りくる雨か神の崎佐野のわたりに家もあらなくに」を指す。この古歌を本歌として、「駒とめて袖打ちはらふかげもなし佐野のわたりの雪の夕暮」の歌を詠んだ、本歌取りの作歌法を主導した新古今集歌人は誰か。次の中から一つ選び、その番号をマークせよ。

- 1 藤原俊成
- 2 藤原定家
- 3 慈円
- 4 西行
- 5 寂蓮

問七 傍線 g「あかぬ心地して」には筆者のどのような気持ちが表れているか。最も適切なものを次の中から一つ選び、その番号をマークせよ。

- 1 降り続く雨がなかなか降り止まず、滅入っている気持ち。
- 2 雨は降り続けているのに、雨宿りをする家がなかなか見つからず、いらいらする気持ち。
- 3 古歌に歌われた歌枕を歩いているのに、一向に雨が止まず、晴れない気持ち。
- 4 古歌に歌われたのと同じ雨を満喫しきったので、これ以上は求めない気持ち。
- 5 雨が降り続いていても古歌に歌われたのと同じ情景なので、嫌にならない気持ち。

問八 二重傍線イ、ホ「ば」のうち、語法的にはかと異なるものが一つある。それはどれか。次の中から一つ選び、その番号をマ
ークせよ。

- 1 イ
- 2 ロ
- 3 ハ
- 4 ニ
- 5 ホ

問九 空欄 A に入る地名を本文中から抜き出せ。

